

非行の文化におけるアンチテーゼの成立と衰退
：下層階級文化、非行のサブカルチャー、消費文化

山元公平*

**Birth and Decay of Antithesis in Delinquent Culture
： Lower Class Culture, Delinquent Subculture, and
Consumptive Culture**

Kohei Yamamoto*

Abstract

Albert Cohen formulated the cultural background of juvenile delinquency as the theory of "delinquent subculture." His was the first theory to treat delinquency as a phenomenon peculiar to youth, as distinguished from adult crime. However, the validity of his theory rests upon particular cultural and social conditions. In this regard, Walter Miller and David Matza's criticisms cannot be overlooked. According to Miller, the cultural background of juvenile delinquency is contained within lower class culture. On the other hand, according to Matza, the culture that promotes delinquency is contained within the leisured-classes culture (consumptive culture) as part of dominant culture. While Matza's view is diametrically opposed to that of Miller, neither distinguishes a particular delinquent subculture peculiar to youth. For Cohen, the delinquent subculture is created by youths because they are not socialized by either the parents' class culture nor by the dominant culture. In other words, Cohen's theory of delinquent subculture can have validity during the process when the autonomous reproduction by the working class culture declines, and as such is classified as a theory that exists in the transition stage from Miller to Matza. At the same time, this is also the process in which the difficulty of socialization becomes omnipresent and delinquency spreads irrespective of a specific class. It is here that the new theoretical subject of sociological research on delinquency is to be found.

キーワード

非行の文化、下層階級文化、消費文化、文化的逸脱論

*やまもと こうへい：大阪国際大学人間科学部教授〈2004.6.10受理〉

はじめに

少年非行に対する社会学的関心は1920-30年代のシカゴ学派の業績に見られるように、それなりに古い伝統をもつ。だが、非行を専門的に扱う理論として形を与えたのはA.Cohen (1955)であった。彼の非行研究は、「非行のサブカルチャー」論として定式化されるのであるが、それが特筆されるべき理由は、少年非行を他の逸脱行動とは区別して説明されるべき独自の現象として注目し、それを社会学的に理論化したこと、そしてその際、当時最も有力な逸脱行動の社会学的理論であったR.MertonとE.Sutherlandの業績を、それぞれの弱点を克服するかたちで建設的に総合化したことに見られる。この意味で彼の理論は、最初の本格的な非行の社会学的理論であると同時に、その時点での逸脱行動に関する社会学理論の到達点でもあった。

しかし、Cohenの理論は決して非行の理論の最終的な決定版ではない。それは理論的装置としての欠陥によるというよりは、その妥当性が適用される社会状況に依存することによる。たしかに彼の非行のサブカルチャー論は理論枠組としてはかなりの完成度をもつものであるが、にもかかわらずそれは特定の歴史的な社会状況のなかでのみ有効性をもつ。そこで、どのような状況において有効であり、またどのような状況においては有効性をもたなくなるのか、このことを明らかにすることが、その理論的な基本枠組としての成果を継承しつつ、それを今日的に発展させるヒントを与えるであろう。

I : A.Cohenの「非行のサブカルチャー」論の学説史的位置

I-1 : Mertonの緊張論とSutherlandの社会的学習論の概要

まず、Cohenの理論に先行するMertonとSutherlandの理論を概観しておこう。

Merton (1957=1961) が注目する現実、さまざまな逸脱行動の発生率が社会の特定の位置に分布していることであり、明らかにされるべきはこの分布の構造的な理由である。この課題は、逸脱行動への圧力の社会的形成を明らかにすること、すなわち逸脱的動機を生み出す社会的環境を理論化することへと向かわせる。その際、Mertonがこの説明のために使用する社会的環境の概念は、社会構造(階級構造)と文化構造(文化的目標と制度的規範)である。アメリカでは経済的成功という文化的目標はすべての国民に等しく強調されるが、それを達成するために必要な合法的手段(それは制度的規範によって定められている)の実際の利用可能性は社会構造上の位置によって制約される。したがって、この接近機会が限られている下層階級において成功目標と制度的規範との間に緊張が生じる。逸脱行動はこの構造的に生み出された緊張という問題の解決である。逸脱行動の社会学的諸理論を分析レベルによってマクロ的アプローチとミクロ的アプローチに区分するならば、Mertonの理論は典型的なマクロ理論である(J.Orcutt, 1983)。また、逸脱行動の諸理論は、その社会的原因の求め方によって、統制論、緊張論、文化的逸脱論の三つに分類されるが、この分類においてはMertonの理論は、最も純粋な緊張論の代表である(R.Kornhauser, 1978)。

他方、Sutherland (1939) にとっては、逸脱行動の統計的な発生率ではなく、個人が具体的に犯罪にコミットするに至る条件が焦点になる。彼の社会的学習論では、犯罪を動機

づけるのは犯罪を支持する価値の学習である。社会には単一の支配的な文化だけが存在しているのではない。つまり、行動を動機付け、方向づける規範はコンベンショナルな価値だけではない。彼の立場は文化的な相対主義である。逸脱行動が発生するのは、規範が内面化されていないからではなく、学習された規範が支配的文化からすると逸脱的であるからである。この意味において、Sutherlandの社会的学習論（分化的接触論）は文化的逸脱論の一つに分類され、緊張論や統制論と対比される。1940-50年代、一方のマクロレベルのMertonの緊張論に対して、Sutherlandの分化的接触論はミクロレベルの理論の代表であった。

I-2：Cohenの非行のサブカルチャー論の概要とその意義

Cohenは、「非行のサブカルチャー」を労働者階級の少年に固有なものとした。こうした社会的な分布の理由は、社会構造と支配的文化が特定の階級に緊張を生み出し、それが非行への圧力となっていると見ることで説明される。非行は構造的に生み出される緊張への適応であり、不満を解決する方策である。このように見る点で、彼は基本的にはMertonの構造的な緊張論の枠組を継承している。しかし、Cohenや、彼よりもやや遅れて主著を公にしたR.ClowardとL.Ohlin（1960）は、非行を問題に対する個人的な適応ではなく、集団的な問題の解決とみる。すなわち、彼らによれば、Mertonの説明はマクロな社会的・文化的な環境によって生じる構造的な緊張が無媒介に（直接的に）個々人に作用し、人びとはそれに個人的に対応しているとみなしており、彼らはその点が理論として不十分であるとみる。彼らにとって、逸脱行動の根本的な圧力は構造的な緊張がもたらす不満であるが、非行行動を具体化させる要因は集団的な問題解決の形態であり、それは逸脱的な規範（非行の文化）である。

この非行文化の学習過程はSutherlandの理論により補完される。つまり、非行のサブカルチャー論は、緊張論の枠組のなかに文化的逸脱論の立場を導入する。逸脱行動を構造が生み出す不満への適応として説明する緊張論と、逸脱行動を逸脱的な規範の学習によって説明する文化的逸脱論は異なる射程をもつが、両者はかならずしも排他的な関係にあるのではない。CohenやClowardは、一方のマクロなパースペクティブから把握された構造的な緊張と、他方の具体的な行動の間に逸脱的文化としてのサブカルチャーを介在させる。つまり、緊張論のいう逸脱への構造的圧力を背景にしつつも、それが特定の形態をもった逸脱行動へと具体化される条件としては、逸脱的な規範の学習によって過程的に説明する。翻って、逸脱文化の存在を与件とする文化的逸脱論が陥りがちな傾向に対して、非行のサブカルチャーの由来は緊張論に基づいて構造的に説明される。このようにしてCohenやClowardの非行のサブカルチャー論は、その時点での逸脱行動の二つの代表であったMertonとSutherlandの理論を積極的に摂取して総合しつつ、それらの限界を克服したのであり、そうした意味で、その業績はこの時代における逸脱理論の集大成と言えたのである。

しかし、Cohenの非行のサブカルチャー論は、単にMertonとSutherlandの理論を統合しただけで帰結する産物ではない。まず彼は、犯罪の多くを経済的な成功という文化目標と

合法的な手段の利用可能性との乖離によって、つまり功利的な「目的と手段」図式によって説明するMertonの立場は、少年非行の説明としては有効ではないと見た。彼は、少年非行に見られる短絡的な欲望の充足や、悪意に満ち、非合理で暴力的・破壊的な行動を非功利的な表出性として注目し、非行を経済的・功利的な動機が中心である大人の犯罪と区別し、少年に固有な逸脱現象として捉えることを目指した。この立場は、その説明においても、大人の逸脱行動とは異なる少年非行に固有な社会的要因の析出に向かわせる。非行のサブカルチャーの形成にとって背景となる社会環境は、Mertonと同様に、一方での社会構造上の位置、すなわち階級構造の存在と、他方での支配的な文化としての中産階級文化の普遍的な浸透である。しかし、これらのマクロな構造を前提としながらCohenは、少年にとってより具体的に直接的な社会的環境として学校という社会化の場と、少年が属する親の階級文化がそこにもたらす影響に注目するのである。

学校は労働者階級の少年をも含めてすべての少年にとっての重要な社会環境となっている、ということがCohenの基本的な認識としてある。そして、学校における評価は中産階級の文化が基準になっているとみる。この評価は労働者階級の文化のなかで育ってきた少年には不利になる。しかも少年たちも中産階級の価値尺度を内面化し、それを評価基準として承認している。そこで彼らは学校における評価のされ方を無視するわけにいかなくなり、この尺度から見た評価の低さに屈辱を感じ、「地位の不満 (status-frustration)」が生じる。これが少年にとって解決されねばならない問題である。Cohenはこの問題に対する三つの対応を挙げている。その内の二つはW. Whyte (1943=2000) の用語に由来するカレッジ・ボーイとコーナー・ボーイである。カレッジ・ボーイは親の労働者文化から脱却し、中産階級へと上昇することを目指す。コーナー・ボーイは親の労働者文化に一体化し、労働者として再生産される少年たちである。第三番目の対応はそれらのいずれとも異なる非行少年たちである。彼らは中産階級の文化とは別の評価基準によって、しかも親の労働者文化を採用するのではなく、独自に「地位の不満」問題を解決しようとする。そのことは個々人が単独で行うのではなく非行のサブカルチャーという集団的な企てによって達成される。非行のサブカルチャーの性質を規定する重要な前提は、労働者階級の少年たちが親の労働者文化の影響のもとで育ちながらも、同時に中産階級の評価基準をも内面化していることである。そのため、この基準を打ち消すために、非行の文化は規律的・禁欲的な中産階級文化へのあからさまな否定を表現するものとなる。「非行サブカルチャーの特徴は中産階級の基準の明確で見境のない拒絶であり、そのまさしくアンチテーゼの採用である」(Cohen, 1955: 129)。この「反動形成」が非功利的な非行サブカルチャーの本質を成しているのである。

Cohenの理論の特徴は、非行サブカルチャーを非行少年の社会的属性と年齢的属性の二つの視点から眺めている点にある。Cohenにとって非行のサブカルチャーは、少年の現実であると同時に社会における階級の現実でもある。この視点からCohenは、労働者階級の少年の逸脱的文化を、少年が支配的文化にも親の労働者階級文化にも容易に回収されえないという問題性、つまり少年が社会化の中で直面する問題性として説明した。そこでは、Mertonとは異なり、非行は少年に独自の逸脱現象として対象化されているのであるが、

その「少年に独自の逸脱」ということは行動の形態における非行の特性に注目した点にあるだけでなく、非行を社会化の過程に内在する現象として説明した点にある。それと同時に、社会化の困難性を少年期一般の問題性としてではなく、あくまで特定の階級の少年にとつての問題性としてとらえ、それが生じる所以を社会構造論的に理論化したのである。

I-3：論点としての親の階級文化の影響

Cohenが示した非行のサブカルチャーを考察する際に、見過ごすことができないのは、非行少年がそこで生まれ、育った家族において被る影響への注目である。それは、少年の親が社会構造の中で占める位置に対応する労働者階級の文化である。Cohenや、ClowardとOhlinは、非行のサブカルチャーの成立背景を、Merton理論の基本枠組を踏襲して、階級的な社会構造と支配的文化が生み出す緊張への反応によって説明するとともに、この形成にとつての文化的環境としては支配的文化のみならず親の階級文化の影響を重要視する。このことは銘記されるべきである⁽¹⁾。

非行のサブカルチャーは、それが若者のサブカルチャーである以上、支配的文化や親の文化から少なくとも相対的に自律していることが前提である。特にCohenにおいては、非行のサブカルチャーはもちろん支配的文化ではないが、それは親の階級文化の内容をそのまま継承するものでもない。その非功利的・表出的な内容において、それが若者独自の非行文化であることが強調されている。しかしそれにもかかわらず、このサブカルチャーの形成は、支配的文化と親の階級文化、および両者の間の葛藤を背景にして説明されるのである。つまり、CohenやClowardが描く非行のサブカルチャーの特徴は、親の労働者階級の文化が少年に及ぼす影響の程度やあり方について、彼らがどのような認識をもっていたのかに大きく依存している。そして、この階級文化の影響への注目は、単にMertonのいう社会環境（社会構造と支配的文化の理論）とSutherlandのいう逸脱的文化の学習を統合することからだけでは出てこない部分である。

まず、彼らの非行のサブカルチャー論にとって、労働者階級の少年が家族を通して親の階級文化をすでに内面化していることが初期条件としてある。だが、その内面化がその後の安定したアイデンティティを保証するのか否かは、親の階級文化自身が支配的文化との関係のなかでどの程度自律的であるかによっても規定される。つまり彼らの理論は、支配的文化が階級文化におよぼす影響のあり方についての認識にも依存している。さらに、彼らの描く非行サブカルチャーの特性は、上の事態を背景にして、労働者階級の少年自身が親の階級文化をどのように対象化して見ているのかに規定される。

しかし、親の階級文化の影響力についての認識の仕方は論者により多様であり、それは非行の文化的逸脱論のなかにかくつかのバリエーションをもたらす。そしてこのバリエーションの存在は、Cohenの理論もそのなかで一定の位置を占めることを意味する。さらにこのことは、これらの認識の仕方をめぐって彼の非行のサブカルチャー論への批判を予想させる。事実、Cohenの理論に対しては、同時代においてさえ、W.Miller、D.MatzaとG.Sykes、ClowardとOhlinなどによる批判が相次いで登場した。Millerは非行の文化的逸脱論に立ちながら非行のサブカルチャーの概念を否定し、Matzaは非行の文化的逸脱論を

否定するなかで独自の非行のサブカルチャーの概念を展開した。その際の表に現れた争点は、Cohenによる非行の文化的逸脱論的なとらえ方に対するものであったが、それらはそれぞれの論者による階級文化の理解の仕方と密接に関連していた。そしてこれら批判者は単なる批判のみならず、批判を通して彼ら自身の非行と文化についての理論を提示し、それをCohenの理論に対置したのである。これらのことは、非行の理論化がCohenの理論によって完成したのではないことを示している。MillerやMatzaの研究の存在は、Cohenの理論の妥当性を相対化するものであると同時に、その特色を浮き彫りにするものでもある。

Cohenのサブカルチャー論は「逸脱行動」の社会学理論としてはSutherlandとMertonの理論的系譜に位置づけられることが多いが、上のような事情を考慮に入れ、それを「非行文化」の社会学的な研究として限定してみる場合には、MillerとMatzaとの対比において特徴づけることがより重要なこととなる。

Ⅱ：W. Miller：下層階級文化の重視と非行サブカルチャー論への批判

Ⅱ-1：Millerの非行研究の概要

Miller (1958) は、非行を逸脱的な価値の学習の所産であるとする点でCohen同様、明確に文化的逸脱論の立場にたつ。しかもその文化を階級の視点から考察した。しかし、彼の論考の主眼の一つは、Cohenの非行のサブカルチャー論を批判することにあった。これはどういうことなのか。

Millerにとって非行は下層階級の若者の現象であった。彼の非行の説明は、下層階級の地域社会についての把握の仕方と連動している。彼の描く下層階級の地域には独特の安定した文化が存在している。「下層階級の文化は、それ自体の本来の姿をもち、数百年もの歴史のある特有な伝統である(1958:19)」。この下層階級文化は「荒っぽさ」「抜け目のなさ」「自律性」「興奮」といった固有の「関心をひく対象領域 (focal concerns)」から成り、それは他のコンベンショナルな文化の影響から隔絶している。Millerによると、それらの固有な文化の内容は、支配的文化から見れば異質であるが故に逸脱的な性質をもつことになり、結果として「下層階級文化の全体的生活パターンの本質的要素からなる特定の文化的実践に関与することは、自動的に一定の法的規範を破ることになる」とみなされている(Kvaraceus and Miller, 1959: 68-69)。

Millerの文化をとらえる多元的な視点は、Mertonの文化に対する視点と対極をなしている。すなわち、Mertonは、社会構造レベルではそれが階級的に分割されていることを重視したが、文化のレベルにおいては、階級ごとの生活様式や価値の存在を全く無視しているわけではないが、それ以上に金銭的成功という文化的目標から成る支配的文化が一元的に社会全体に貫いていることを強調した。緊張論は社会構造上の階級論と文化的なコンセンサスモデルとの組み合わせから成立する理論であった。それに対してMillerは、全体社会における文化には一元的なコンセンサスがあるとはみなさない。たとえば彼が下層階級の社会と呼ぶ場合、それは何よりもまず他と区別された特有な文化システムに言及するものであり、特徴的な生活様式、価値、行動パターンから成るものであった⁽²⁾。それは支配

的な文化が及ばない文化的世界である。要するにMillerの下層階級社会への認識は文化的なコンフリクトモデルに基づいているのである。この立場は、逸脱行動の発生条件によって異なった視点を提供する。すなわち、文化的コンセンサスモデルが階級的な社会構造を背景にすると構造的な緊張を生じさせ、それは個人の心理における不満へと帰結するのに対して、文化的コンフリクトモデルは個人の心理的な不満や反発を発生させるメカニズムに言及するものではない。文化的コンフリクトモデルは逸脱行動を、コンセンサスモデルに基づく緊張論のように不満への反応としてみるのではなく、支配的な文化とは本来的に異質な内容をもつ社会集団の文化に同調することが結果的に逸脱行動となる、とみなすのである。

Millerは下層階級社会を周囲から隔絶された別世界として描いている。Kornhauserは、Millerが想定しているような下層階級文化は「彼の想像の中のみ存在している」ものであって(1978:208)、そのようなものは実際には存在しないし、根拠のないものであると批判している。この批判の妥当性はともかくとして、たしかに彼の描く下層階級の地域社会は古典的なスラムのイメージに基づいているといえる。それは、シカゴ学派の描くスラムから社会解体の側面を取り去って純化された、いわばスラム文化の理念型である。

Millerは、こうした下層階級の地域社会における伝統的な文化と若者の非行行動との連続性を重視するのである。彼の非行の文化的逸脱モデルを特徴づけるものは、非行を方向づける逸脱的規範が周囲から自律し、内部的に安定した下層社会の文化の一部である、とすることである。この前提となる認識は、一方では、非行を促すのは逸脱的規範であり、そうした規範は特定の階級に集中するという文化的逸脱論の立場の点ではCohenの理論と一致するとしても、他方ではその逸脱的規範を内容においても、由来においてもCohenの描いた非行のサブカルチャーと全く異なったものにする。

そもそも周囲から隔絶し、自律的で、固有の伝統をもつ下層階級の地域社会における若者には、学校で中産階級の評価基準を共有するが故に生じる「地位の不满」はない。したがって非行へと方向づける価値は、地位の不满を解決するために中産階級の文化を逆転させようとする「反動形成」によるものではない。非行行動は、支配的な中産階級文化に反抗する少年たちの独自の規範形成によって生じるのではなく、むしろ、下層階級の生活様式それ自体が本来的に法律に違反する行動を生じさせる傾向をもつことに由来するのであり、親の文化への同調が自動的な結果として法規範に違反させるのである。

Millerによる非行と下層社会文化とのつながりの重視は、非行の担い手のとらえ方にも現れている。彼の描写においては、親の文化と一体化しようとするコーナー・ボーイが非行の担い手でもある。Cohenのように非行少年と一般のコーナー・ボーイとの間に明確な区別を設けない。すなわち「若者のストリート・コーナー集団はこの下層階級の構造形態の若者型を表現している」のみならず「法律違反活動への参加の頻度に基づいて定義される『非行ギャング』と呼ばれてきたものは、この形態の下位類型である。この下位類型はそれ自体としては研究の正当な単位とみなされるべきではなく、若者のストリート・コーナー集団の一つの変形とみなされるべきである」とされているのである (Miller,1958:14)。

非行ギャングを「ストリート・コーナー集団の下位類型」とみなすということは、非行を下層階級社会の生活様式が代代的に継承されたものとみなすことでもある。若者を非行へと方向づける規範は、親の伝統的な下層階級文化の中に包摂される。そして、非行の文化は下層階級文化の一部であるというMillerの認識は、若者に固有な非行のサブカルチャーの概念を否定するという含意をとまなうことになる。すなわち、このことは、「ギャング」非行の行動に最も直接的な影響を及ぼす文化システムは、「中産階級の文化との葛藤を通じて生じ、中産階級の規範を故意に違反することへと方向付けられている『非行のサブカルチャー』と呼ばれるものであるよりも、下層階級コミュニティそれ自体の文化システムである」ということを意味しているのである（Miller,1958：5-6）。たしかにそれは文化的逸脱論であるが、こうした非行を促す下層階級文化をCohenのいう意味での非行のサブカルチャー、つまり若者に固有な反抗的な逸脱文化としての非行サブカルチャーと呼ぶのはふさわしくない³⁾。

このように非行の文化を下層階級文化と同一視することと相まって、Millerの理論の中では、非行の文化の内容、及びその発生論的起源を青年・少年に独自の現象として説明する視点は後退する。たしかに、「下層階級文化の関心のパターンの相対的な重点は、若者にとってと大人にとってとはいくぶん異なっており（1958：15）、また、下層階級文化が若者なりに誇張されて表現される、ということはある。その理由の一つは若者の仲間内での「所属」や「地位」への関心である。とりわけコーナー集団のメンバーの「大人らしさ」への「願望の強さは、（荒っぽさや周囲から拘束されない自由などの）大人らしさに関連する資質を誇示する必要性を下層階級の大人よりもはるかに強く若者に感じさせる」（1958：16）。こうした点では、下層階級社会のコーナー集団の非行には、大人の行動とは異なる若者に固有な事情が見られる。しかしながらそのことも結局のところは若者文化としてオリジナルなサブカルチャーであるというよりも、「下層階級文化の若者版は、その（下層階級文化の）最も特徴的な性質の極限化と強調された明示性を表現する」ものなのである（1958：16）。むしろMillerの描くところによれば、安定した下層階級のコーナー・ボーイは下層階級社会の中で自足的に社会化されており、非行は下層階級社会における順調な再生産過程のなかに吸収されている、と言えるだろう。

II-2：Millerを踏まえたCohenのサブカルチャー論の特徴

Millerによる下層階級の非行に対する説明は、文化的逸脱論であると同時に、文化的コンフリクト論でもある。こうしたMillerの主張と比較するとき、Cohenの非行の理論を際立たせるのは、それが文化的逸脱論であると同時に、緊張論でもあるということである。このことは、彼の非行文化への視点が表面的には文化的コンフリクト論であるとしても、発生論的な理解においては緊張論が依拠する文化的コンセンサス論であることを意味する。このことが、ともに文化的逸脱論の立場でありながら、MillerとCohenの主張の違いを生み出す根底にある。MillerによるCohenの非行サブカルチャーに対する批判は、直接的には非行の緊張論的解釈、つまり非行を不満に基づく反抗と性格づけることに対する批判であったが、それはつまるところCohenの緊張論が前提としている文化的コンセンサス

論（支配的文化があらゆる階級に浸透している）に対する批判であったのである。

だが、前述のようにCohenもまた労働者階級に固有な文化の存在に留意していることを軽視することはできない。つまり、サブカルチャーの形成をMertonから踏襲した社会構造と支配的文化だけで説明しているのではない。Cohenは、親の労働者階級文化が子どもの生活習慣や身体的な立ち居振る舞いに刻印されていることに注目し、その影響が非行のサブカルチャーの形成に及ぼす意義を重視している。しかし、この労働者階級の文化のとらえ方においても、コンセンサスモデルのパースペクティブが浸透している。

Cohenが非行のサブカルチャーの形成要因を考察する際に、親の労働者階級文化の影響に注目する理由は、Millerのように下層階級の若者が下層階級社会に独特な文化内容に一体化し、それを継承している点にあるのではない。Cohenが見るところによると「アメリカ社会におけるほとんどの子どもたちは、どのような階級であろうと、ある程度は中産階級の価値システムを吸収している」のである（Cohen, 1955: 104）。さらに言えば、そもそもすでに労働者階級自体が中産階級文化の浸食を被っており、「中産階級の目的を本質的に価値のないものとして明確に拒むような労働者階級の親はほとんどいない」ものと見積もられ、むしろ親の世代においても「大部分の労働者階級の人びとは文化的にアンビヴァレンスな状態にある」とみなされているのである（Cohen, 1955: 124）。

Cohenの描く非行のサブカルチャーの成立の条件は、階級構造、及びそれに応じた労働者の階級文化が生活様式として現に存在しているということと同時に、その階級文化の自律性が低いということである。すなわち、子どもはその生活習慣や身体的振る舞いにおいて家族の影響を強く被っているにもかかわらず、中産階級文化があらゆる階級のなかに普遍的に浸透し、共通の評価の尺度となっているという事態である。一方では生活様式としての階級文化が依然として存在するなかで、他方の評価基準については文化的コンセンサスが成立しているのである。

とりわけ子どもがこの二面性に直面するのは学校においてである。子どもは学校のなかで支配的文化としての中産階級文化の評価を被ることになり、このことが親の階級文化の中で育ってきた自らの振る舞い方との緊張を生み出し、彼らは「地位の不満」という解決されるべき問題を抱え込む。この問題に対して、集団的な解決を与えるのが非行のサブカルチャーであった。その際Cohenは、安定したコーナー・ボーイを非行文化の担い手とは見ていない。カレッジ・ボーイは中産階級の文化を同化することによって親の階級からの脱出を目指し、コーナー・ボーイは労働者文化と一体化することで親の階級に適應し、そのことで緊張を回避していくが、非行少年とはそれらのいずれにも属さない少年である。非行のサブカルチャーは中産階級的価値の否定を表現する文化であるが、この否定は親の階級文化への同一化によってなされるのではなく、むしろ親の文化にも背を向けた少年たちのみ固有な文化によってなされるのである。非行サブカルチャーは、中産階級文化と労働者階級文化の双方の影響を逃れがたく受けつつも、それらいずれからも断絶しているのである。このことが、非行の文化の質を規定する。たしかに非行のサブカルチャーは、中産階級的価値に取って代わる新たな評価基準を提供する。しかしながら、その中産階級文化に対するあからさまな否定は、実のところは非行少年が「結局のところ中産階級の道

徳によって支配されている社会の中で社会化され、中産階級社会の甘言から完全には逃れることができない」がゆえに取らざるを得ない「過剰な反発」なのである（Cohen, 1955:133）。かくして、非行のサブカルチャーは、支配的な文化に対するアンチテーゼとならざるを得ないのである。

Cohenはある意味では、親の階級文化の影響の大きさに留意している。しかし、Millerとは反対に、少年の社会化の過程が親の階級文化に包摂されないからこそ非行のサブカルチャー論が成立するのである。階級文化は、それが中産階級文化の影響によって脅かされ、少年の社会化の過程でもはや一体化されるべき規範とはなり得なくなっている点でこそ、非行サブカルチャーの形成に寄与するのである。Cohenの描くところの悪意に満ち、苛立った非行少年の背景には、中産階級の価値を体現する学校の役割の普遍的な浸透と、子どもの社会化における労働者階級文化の役割の低下がある。しかし依然として、家庭における階級文化が子どもの振る舞いの様式に刻印されており、それと同時に、学校は労働者階級の子どもの社会化を担い切れてはいない。つまり、学校文化も、労働者文化も、社会化の機能を十分に果たしていない。非行のサブカルチャーはそれらのいずれの再生産のルートからもはみ出すところで成立する。

Cohenは、非功利的・表出的な非行の背景に労働者階級の少年が直面する社会化の困難性を見ていたのである。このことにより、非行のサブカルチャーは労働者階級という社会的属性をもった少年の現象であるとしても、それは階級の文化や大人の犯罪文化には決して解消されないまさしく少年期に固有の現象となる。非行は、階級という社会構造的な属性のもとで理解されるとともに、子どもの社会化過程に固有の問題にもなるのである。

Ⅲ：D.Matza：支配的文化の重視と非行サブカルチャー論への批判

前章でみたように、Cohenは文化的逸脱論の立場から、非行のサブカルチャーが社会構造レベルでは労働者階級という社会的属性と不可分であることを示した。同時に彼は、文化構造のレベルでは、それを労働者の階級文化と同一視することはしなかった。それは、非行サブカルチャーの成立をめぐる彼の構造的な把握のベースには、Mertonの文化的コンセンサスモデルにもとづく緊張論があったからである。こうしたCohenの理論に対してMillerは文化的逸脱論の立場に立ちつつも、文化的コンフリクトを重視する立場からCohenが非行と親の階級文化との結びつきを軽視していると批判した。しかし、Cohenの非行のサブカルチャー論は文化的逸脱論である以上、非行の文化は階級文化に包摂されないとしても、支配的文化にも包摂されない。それに対してMatzaは、Millerとはいわば逆の立場からCohenの文化的逸脱論としての立場そのものを批判し、また結果的に非行を特定の階級に関連づける基本認識そのものを否定するに至った。このことは、非行の理論にどのような新たな展開をもたらしたのだろうか。

Ⅲ-1：Matzaの非行研究の概要

Matza (Sykes and Matza, 1957. Matza,1964) のCohenへの批判は、なによりもまず彼のサブカルチャー論が文化的逸脱論であること自体に向けられている。それは、内面化され

た逸脱的規範を非行の原因に据えること、すなわち「独立変数としての信念」への批判である(1964=1986:25)。Matzaによれば、Cohenの理論は、少年が非行サブカルチャーに強くコミットしていると想定しており、また、非行のサブカルチャーとコンベンショナルな文化との内容上の違いを強調しているが、それらはいずれも疑問だとされる。なぜならば、非行少年は逮捕されたとき自らの信ずる価値にしたがってそれほど毅然とはしておらず、また年齢的に成長するにしたがって大部分はコンベンショナルな社会に同調するようになるからである。要するに、Cohenは非行少年と同調少年、非行文化と支配的文化の差を強調しすぎていると批判されるのである。したがってこの点に関しては、Cohenのみならず、彼と同様に文化的コンセンサスモデル=緊張論に基づくClowardとOhlinの非行サブカルチャー類型にしる、下層階級の文化的自律を主張するMillerの文化的コンフリクトモデルにしる、文化的逸脱論である限り否定される。

Matzaは、非行行動が「逸脱的な」規範によって決定され、固定されるのではない、と主張しているのである。大部分の非行少年は、成長とともにやがて更正する。少年は発達段階の一定の時期に同調と逸脱の間を「漂流」しているにすぎない。非行は、内面化された逸脱的規範によって形成される固有な動機によってなされるのではない。したがって、彼にとっては、逸脱的な規範による逸脱的な動機の社会的形成といった文化的逸脱論のテーマは考察の対象にはならない。動機の次元では同調少年も非行少年も差はない。そうであるとするならば、少年が非行行動を行うのか同調行動を行うのかの差は、社会統制の次元に属する。この点で、Matzaは、T.Hirschiに代表される統制論に接近する。

動機レベルでは非行への可能性はだれにでもある。他方、非行少年もまたコンベンショナルな社会の規範を内面化している。非行のきっかけは非行に対する罪悪感が解消されることにあり、それは非行を何らかの理屈づけで合理化し、内面的な統制を中和化することで実現される。この「中和化の技術」の習得が彼のいう非行のサブカルチャーの内実である。MatzaはCohenやClowardとは異なった意味で非行のサブカルチャーという用語を用いている。このサブカルチャーは、支配的文化に対して反抗を企てる対抗文化ではない。それは、文化的逸脱論のように非行を逸脱的な価値規範によって動機づける非行のサブカルチャーではなく、統制の効果を無効化するような言語的工夫を提供するサブカルチャーである。それは、統制論にリンクされた非行のサブカルチャーである。この非行の中和化の技術の習得如何では、非行はすべての少年に可能な現象となり、そのことはまた非行少年は非行に関与しているときにも、同調と逸脱の間を漂流している、ということでもある。このように非行少年と同調少年の差は極小化される⁽⁴⁾。

だが、MatzaはHirschiほどには統制論の立場を純化していない。統制論の立場を純化し、非行行動への動機を生得的与件とみなすHirschiにとって動機付けはもはや社会学的な考察対象とはならない。しかし、Matzaは単に統制レベルでの「中和化の技術」の検討のみならず、「そもそも非行を魅力的なものにするものは何か」という、いわば動機への問いを設定し(Matza and Sykes,1961:713)、それを社会学的に考察している。「中和化の技術」がミクロレベルの統制論的理論であるのに対して、「何が非行を魅力的なものにするのか」という問いはマクロレベルでの全体社会の文化の問題として理論化される。この非行へと

惹きつけるものは目的や価値である。しかしそれを考察する際に、文化的逸脱論のように「安易に、非行少年はその価値において逸脱的であり、より大きな社会と対立していると想定」するべきではない、というのが彼の基本的立場である（1961：715）。非行行動へと惹きつける価値は、下層階級の文化でも、非行少年のサブカルチャーでもなく、支配的文化に組み込まれた「有閑階級」の文化である。

Matzaの観察によると、同時代のアメリカの非行少年の価値は、かつてVeblenが描いた「有閑階級の紳士」のそれと類似している。すなわち「(非行少年の価値である) 向こう見ずさや冒険心の強調、面白くもない労働の規律の拒絶、贅沢で顕示的な消費への嗜好、力によって示された男らしさに払われる敬意、これらすべては有閑エリートの冷笑的な像に原型を見いだすことができる」のであり、「有閑階級の価値が多くの子非行的活動の背後にあるように見受けられる」と指摘する（1961：715）。

しかし、この有閑階級の価値は、全体社会に対立するような「逸脱的な」価値ではない。そもそも、Matzaにとっては支配的な文化が均一ではない。従来、逸脱研究の社会学者は「逸脱を測定できるような基準を作り出すことを急ぐあまりに、全体社会の価値システムを中産階級の価値システムに還元してしまった（1961：715）」。彼にいわせると、これは同時代社会についての現状認識として誤りである。むしろ、「有閑階級の価値はますます支配的社会における多くの個人の活動を染めるようになってきた」のであって（1961：716）、それは社会の表舞台で公認されている「上品な外見をもっている」中産階級の価値ではないが、にもかかわらずそれと並存している「裏の価値 (subterranean value)」であり、それもまた支配的な文化の一部を構成しているのである。

Matzaが念頭に置いているのは、1950年代以降のアメリカ社会が、消費社会としての姿をはっきりと顕在化させつつあり、文化的変容を示しているという事態である。そこでの支配的文化は、もはや禁欲的職業倫理を核にした中産階級の価値規範に限定されなくなっており、「支配的社会が勤勉な労働と慎重な節約という美德にどっぷりと疑問なく惹きつけられていると特徴づけることは現実を歪めるもの」となる。むしろ「現代社会における労働の状態は天職としての初期の労働についての考え方を破壊してしまい、仕事をできるだけ素早く、苦勞せずに貨幣を稼ぐ場所として定義させる強力な圧力がある」とみられているのである（1961：717）。現代社会の支配的な文化のなかには、一方での中産階級の禁欲的職業倫理に対して、かつてVeblenによって「有閑階級」として描かれた生活態度・行動様式が「裏の価値」として社会全体に組み込まれている。後に「資本主義の文化的矛盾」として定式化するDaniel Bellに言及しつつMatzaは「我々はプロテスタントの倫理とレジャーの倫理との妥協を目撃している」と時代の変化を表現するのである。VeblenやBellが引用されているところからも伺えるように、Matzaが念頭に置いている同時代の文化とは、「消費社会」の文化である。

非行へと方向づける文化はこの消費社会において広まった有閑階級の文化であり、非行はこの文化の一つの表現形態になった。非行少年は「支配的な価値システムの一部、すなわちより上品な外見をもって表舞台で通用している価値と並存している裏の価値を拾い出し、それを強調した」のである（1961：717）。このことには二つの含意がある。

一つは、有閑階級の文化が支配的文化の一部であるとすれば、それに従う非行は行動においては逸脱とみなされるとしても、非行の基本にある価値や目的においては支配的文化の一部である、ということになる。Matzaは「もし非行少年がこの考え方（仕事をできるだけ素早く、苦勞せずに貨幣を稼ぐ場所としてみなす考え方）を多くの社会の成員よりも拡張するとしても、彼は必ずしも新しい価値の領域に移行したわけではない。同様の文脈で、誇示的な消費への非行少年の愛着が、彼を支配的な社会にとってのよそ者にすることはほとんどない」のであり、「彼は社会から逸脱しているよりもむしろ社会に同調しているのである」と主張する（1961：717）。このように非行を価値づける文化に言及する場合においても、Matzaは逸脱的な規範が非行を価値づけるとするMillerやCohenの文化的逸脱論とは異なっている。ここでも、非行少年と同調少年との違いの小ささを再確認するものとなるのである。

二つ目に、非行へと惹きつける文化は、若者が属している消費社会全体の文化の若者バージョンであって、たとえ「裏の価値」としての有閑階級の価値をことさらに「拾いだし、強調した」ものであるとしても、それは根底においては大人とも共有された文化であり、若者のサブカルチャーとはみなされない。若者文化としてのオリジナリティが否定されているのである。この点に限っていえば、それは、Millerにとっては下層階級の若者を非行へと導く文化が下層階級文化の若者バージョンでしかなかったことと共通している。Matzaは「単に非行少年の行動であるよりも多くの少年の行動が、まったく特異な青年のサブカルチャーの産物としてよりも、大人の世界の拡張として分析されうるだろうということ」を、「そのことがまさしく我々の命題である」と強調している（1961：717-8）。非行の文化的背景を階級文化に包摂したMillerと、支配的文化の一部として有閑階級文化に包摂したMatzaは、Cohenによって描かれた青年・少年のサブカルチャーを間において全く反対の極に立ちながら、共に非行少年に独自の非行のサブカルチャーの概念を否定していることになる。

以上のようにMatzaは、非行は行動において逸脱的であっても、価値や目的においては逸脱的ではないと主張する。非行をうながす価値を論じつつも、そのことは文化的逸脱論の立場への批判をより堅固にする。そして、彼のこうした主張は、非行を特定の階級に関連づけて論ずる枠組の否定につながっている。

Matzaによる非行の階級論的分析への否定は、それほど念の入った論証・実証によるものではない。それは、わずかな経験的な事例の引用によっている。たしかに「初期の時代においては、下層階級は『不道徳性』を含めてほとんどの態度において彼らの上位者から区別され、この道徳上の墮落が非行行動を生み出していると信じることはそれほど困難ではなかった」ことは認める。しかしながら、Matzaは下層階級に偏るこれまでの調査方法に疑問をもつ研究者が出現していることに注目し、「少年非行は中産階級や上流階級においてもしばしば生じており、最近の研究は、過去の研究よりも、これらの集団における非行をより説明」するようになってきたことを重視する（1961：718）。そして、これらを事例とすることによって非行と階級との関連性を否定する結論へと帰着する。この論の運び方にはかなり性急さが感じられる。むしろ、文化的逸脱論の否定という彼の理論的主張が、

非行を階級的属性とは関わりのない現実とみなす認識と不可分に結びついているのである。彼にとって重要なことは、中産階級や上流階級における少年非行の存在が、これまで下層階級にまつわる説明変数に依存していた理論にとって「深刻な問題を提起している」(1961:718)という結論を導き出すことの傍証となるということである。前述のようにMatzaの基本的主張は文化的逸脱論の否定のうえで成り立つ。そして「非行少年は彼の行動においてと同様に、彼の価値においても遵法から逸脱しているという仮定の存続は、非行少年が下層階級において不均衡に表現されていることを指摘する多くの研究に遡ることができる」と述べている(1961:718)。つまり、文化的逸脱論は階級の概念と不可分であった、と把握されているのである。かくしてMatzaによる文化的逸脱論の否定、及び彼自身の理論の妥当性は、非行の分析にとって階級概念の有効性の喪失という認識のもとで成り立つことになる。翻ってこのことは、非行に魅力を与えるような文化に若者が社会の他の成員よりも惹きつけられる理由を、階級的な属性以外の条件によって説明する方向へと向かわせるのである。

Matzaは、有閑階級の文化はいまや支配的文化の一部となったと指摘するが、同時に「労働という偶像がレジャーという偶像に取って代わられてしまった」というのは言い過ぎであるとも言う(1961:717)。そうではなく、Bellのように「資本主義の文化的矛盾」と表現するか、Matzaのように「職業倫理と消費倫理の妥協」と表現するかは別として、支配的文化のなかで両者は相互に葛藤しつつ、二つの位相として並存しているのである。しかも、これら二つの文化の位相は集団ごとに偏った分布しているのではなく、それぞれの下位的な集団内部に二つの価値が浸透しており、また個々人のなかでもアンビヴァレンスの感情をともしつつ異なる価値が並存していると見られる。

しかし、禁欲的職業倫理と快楽的消費倫理が支配的文化のなかで二つの位相として葛藤しつつ並存しているなかで、現代社会における若者は一方の有閑階級の文化の側にとりわけ惹きつけられる。たしかに、若者の非行は「裏の価値」として有閑階級の文化を拾い出し、誇張したものであるとしても、有閑階級の価値は発生論的起源としては、下層階級の文化ではないと同時に、若者が創造した固有のサブカルチャーでもない。しかし、若者が他の社会の成員よりも熱心に「裏の価値」のみを拾い出し、ことさらに誇張することには、それなりの理由があるとみられているのである。要するに、非行の発生条件を、若者を階級という社会的属性に関連づけることによってではなく、「現代社会において若者としてある」ということ、それ自体の中に見ようというのである。

Matzaは「少年非行のある種の形態は、それらが現れる階級の次元とは関わりなく、共通の社会的な基盤をもっている」という。すなわち有閑階級の価値が若者にとりわけ突出し、「あらゆる階級次元にいるすべての青年はある程度、有閑階級の成員である」のは、「彼らがより若い時期での親の支配と労働や結婚の拘束による将来における社会構造への統合との間の辺土(limbo)へと移動しているからである」ということを基盤としている(1961:718)。これは、前述の「漂流する若者」と符合し、彼の非行理論における核心となる若者像である。大人と子どもの間に放置された状態としての「辺土」があることは、社会史的には近代化のなかで成立したとされる「子ども期」の現代的な展開の帰結であり、

それは特定の階級を越えた現象となってきた。このライフコースにおける段階区分の現代的な形態としての「辺土」において、若者は潜在的に有閑階級である。ここでは、有閑階級の価値の現代版である消費的快樂文化は他の社会成員以上に重要な意味をもつことになり、全ての若者はある程度、現代の有閑階級の価値の担い手となる。そして、有閑階級の価値の追求の一つの形態として非行があるとすれば、非行の可能性は一方の消費社会の文化の形成と、他方の社会化過程における若者期の存在、それ自体にあることになる。つまり、非行の条件は、消費文化を背景にして、家庭の監視と職業生活との狭間の辺土において漂流する若者一般のものとなる。

このようにしてMatzaは、非行を現代の消費社会のなかで社会化途上にある若者全体の現象へと一般化する。非行へと駆り立てる文化は、若者に固有な文化ではない。その内容は支配的文化に属する。若者に固有なのはその受容のされ方である。後者は階級を問わず現代社会のすべての若者の特性であるが故に、非行は社会のなかでどこでも生じるうる現象として一般化して把握される。

Ⅲ-2：Matzaを踏まえたCohenのサブカルチャー論の特徴

以上のように、Cohenのサブカルチャー論に対しては、MillerとMatzaという反対の極から批判がなされてきた。非行と同調との価値規範における差を極小化するMatzaからすれば、Cohenは文化的逸脱論である点でMillerやClowardと同類であるが、下層階級社会の文化的自律性を重視するMillerからすれば、Cohenは自律的な労働者文化の影響力を軽視しており、またこの点では、緊張論の立場に立ちながらも部分的にMillerに接近したClowardから見ればCohenもMatzaと同類となる（Cloward et al., 1960：133-9）。すなわち、Cohenは支配的文化と階級文化の把握において、MillerとMatzaを両極にした中間に位置している。言い換えるならば、彼の非行のサブカルチャー論は両者の中間にあるからこそ成立するのである。それは以下のような理由による。

そもそも、非行サブカルチャーは、それが独自の逸脱的な内容をもった文化である以上は文化的逸脱論の一部である。したがってMatzaのように非行の文化的背景を支配的文化の一部としての「有閑階級」の文化の内部で説明し、文化的逸脱論の視点が否定されれば、非行のサブカルチャーは固有な逸脱文化としては成立しなくなる。次に、非行のサブカルチャーは、階級文化と支配的文化の双方の葛藤する影響下にあって形成され、しかも両者のいずれとも区別される文化である。このことはまず、非行のサブカルチャー論が、非行を労働者階級の若者の現象として注目していることを意味する。さらにそれに加えて、社会構造レベルでの階級に注目するだけでは不十分であり、文化レベルにおいても支配的文化の影響を唯一のもののみならず、階級に固有の文化やその生活様式が存在に留意し、その少年への影響を視野におく必要があることを意味する。しかし他方では、非行のサブカルチャー論は非行文化を階級文化と同一視するものではない。非行を階級文化の影響によって説明するとしても、Millerの理論のように下層階級文化が周囲の社会から自律し、非行を促す価値が下層階級の文化に包摂されている場合は、Cohenの描くような若者に固有な非行のサブカルチャーは導き出されないのである。すなわち、一方の階級文

化への解消と他方の支配的文化への解消といったいずれの極においても、非行のサブカルチャーは成立しない。このような意味で、Cohenの描く非行サブカルチャーは、労働者階級文化と支配的文化の狭間であって成立するのである。

その他のアメリカにおける非行のサブカルチャー論やイギリスにおけるカルチュラル・スタディズの若者のサブカルチャー研究の多くも、支配的文化と労働者階級文化のとらえ方をめぐり、MillerとMatzaを両極とした間に位置づけることができる。しかし、いずれの場合も、一方では支配的文化に浸食されつつも、労働者階級の文化は、その程度や意味はそれぞれ異なるとはいえ、若者に継承されている、あるいは継承されるべきものと若者自身によってみなされており、この点でサブカルチャー形成にとって積極的な役割を演じている⁽⁵⁾。そのなかでCohenのサブカルチャー論は、この中間性をもっとも体现している。非行少年とは、支配的文化と階級文化のアンビヴァレンスのなかでいずれの文化にも回収されえない部分である。そして、非行サブカルチャーは、労働者階級の中から生じるにもかかわらず、双方の文化の葛藤する影響下であって、しかもいずれの文化にも同化しえない若者の独自の文化として形成される。それは、特定の社会的属性をもった少年・青年の文化であると同時に、まさしく社会化の困難性への悪戦苦闘を表現した点においてこそ少年期・青年期固有の文化でもありえたのである⁽⁶⁾。

非行を社会化の困難性の問題という視点から見た場合、MillerとMatzaはCohenとは異なるという限りである種、共通の非行少年・青年像をもっている。MillerやMatzaの描く非行少年・青年は、下層階級文化にしる、支配的文化にしる、周囲の文化に同調している。下層階級文化は文化の内容自体が支配的文化にとって逸脱的であり、それへの同調は自動的に逸脱行動へと帰結し、支配的文化としての有閑階級的「裏の価値」も一面的に拾い出され、誇張されることで（文化的逸脱ではないが）逸脱行動へと帰結することになる。しかし、ここでの非行行動は、支配的文化、階級文化のいずれかに同調する結果であり、それらの文化は若者が直面する社会化のジレンマの中から形成されるものではない。

しかし、MillerとMatzaは以下の点では、Cohenを間にして対極的に異なる。Millerの非行少年は下層階級内での順調な社会化の途上にあり、非行は下層階級としての再生産の一環にある。ここでは社会化はその形式においては問題性をともなっておらず、非行は下層階級という社会的属性の内容によって概ね語ることができる。その非行の理解は、生まれ育った文化による宿命論の色彩をおびている。他方、Matzaの非行少年は、大人と子どもの中で、逸脱と同調の間を漂流している。非行は、支配的文化の二元性を背景にして社会化過程の内に組み込まれた空白状態に生じるエピソードである。支配的文化の二元性は少年をも含めてすべての成員にとっての与件であるが、この文化を背景にして非行が生じる条件は、社会化の型そのものの特性、すなわち、子どもから大人への移行期が不確定で、放置された状態としての「辺土」の時期でもあるということにある。しかもこの社会化過程における「漂流」という特徴は、現代社会においてはすべての少年に共有される。つまり、非行は社会的な属性にかかわらず、あらゆる若者に可能性があると同時に、それは一過的なものでもある。しかしながら、この「辺土」という空白状態と消費の快樂的文化は、若者自身にとっては不快なものとして経験されないとしても、漂流しつつ無事に通り

過ぎなければならぬ幾多の陥穽を孕んだ環境であるとも言える。非行はCohenの描く非行少年が直面した社会化の困難性とは異なる意味で、現代社会における子どもから大人への間の過程に組み込まれた社会化の問題性に関わる現象となるのである。

終章：「過渡期としてのCohen」と「再生産の問題性の遍在化」

非行の社会学のパースペクティブは、これまで非行を説明するための社会的環境をさまざまな概念によって表現してきた。たとえばMertonの「社会構造と文化構造」、Millerの「下層階級の文化」、CohenやClowardの「非行サブカルチャー」、Matzaの支配的文化内における有閑階級の「裏の価値」などがそれである。これらの説明概念の共有は共通の理論枠組を提供する点で有意義であるが、それらの理論を統合化して完結した単一の非行理論を目指すことには、それらの一つを超歴史的に絶対化することと同様に、それほどの意味があるとは思えない。これら諸理論を今日的に継承しようとする場合に重要であると思われるのは、それぞれの有効性が異なる理由を理論が適用される社会的状況の多様性にあるものとし、この社会的状況の変化の中でそれぞれの理論を意味づけることである。

非行をめぐる多様な論者による理論上の相違は、それぞれが構築された状況を歴史的な文脈において比較し、意味づけることができる。この観点からすれば、Cohen、Miller、Matzaの理論は、それらが公表された年代の順序とは異なった位置関係を示すものとなる。Millerが支配的文化から隔絶された古い下層階級の地域社会における非行を描き、Matzaが戦後アメリカにおいて消費文化が浸透した社会の非行少年像を描いているとするならば、Cohenの反動形成、もしくはアンチテーゼとしての非行のサブカルチャーは、MillerからMatzaへの過渡期的現象を描いていることになる。ここではMillerからCohenを経てMatzaへという位置関係が成り立つ。それは、自律的な階級文化の衰退過程を現す流れでもある。このことは次のようにいうこともできる。すなわち、Cohenのみが少年に独自の非行のサブカルチャーを論じられたのは、階級文化と支配的文化のいずれの文化にも同化しえない少年のアンビヴァレンスに注目したからであるが、この独自の非行のサブカルチャーを生み出す条件は、階級文化による自律的な再生産の衰退過程において成立する過渡期的現象であったのである⁽⁷⁾。

Cohenのサブカルチャー論を過渡期的な理論として位置づけるということは、長期的な傾向としてみれば、非行が特定の階級文化と支配的文化の差異だけでは説明されなくなっているという認識をとともなう。もっとも、この認識においても、純粹に経済的な状態と非行との関連の有無については依然、結論は留保される必要がある。なぜならば、衰退しているのは労働者の階級文化としての自律性やアイデンティティであって、このことはただちに失業、所得の格差の拡大、貧困の再生産の消滅を意味するものではないからである。そのことを踏まえた上でなお、MillerからCohenを経てMatzaへという流れは、下層労働者階級に固有な文化や生活様式が全体としての非行の説明変数としての意義を相対的に小さくしていく過程であるといえる。しかしながら他方では、非行それ自体は依然として重要な社会問題とみなされているとするならば、この過程は、非行が特定の階級文化とは関わりなく、少なくとも文化現象としては社会の至るところに拡散して生ずるようになるこ

とを意味するものでもある。それは非行の一般化を現すものとなる。そして、少年非行が大人の犯罪と区別される理由は、それが子どもから大人への社会化の途上における問題である点に見られるのであるから、この非行の発生における遍在化はまた、社会化の困難さ、再生産の問題性の遍在化でもある、ということになるだろう。

かつては非行の原因を、特定の階級の文化的属性に帰属することができた。つまり、支配的な文化や生活様式に従わない「遅れた」階級の文化や生活様式のせいにすることができた。そこでは非行を、学習されるべき文化の内容に関しては、近代社会の支配的文化である規律や禁欲的職業倫理の未成熟故に生じるとみなすことができた。また、社会化の制度的な形式に関しては、近代社会における社会化の理想的モデルとしての近代家族や学校教育がまだ十分に浸透していないからだとみなすことができた。しかし、現代の消費社会では、まず支配的文化そのものが、禁欲的職業倫理に一元化されない。そして、この支配的文化自体が非行の文化的条件を構成している。さらに、支配的文化に反する階級文化やその他の逸脱文化による独自の社会化機能の低下にもかかわらず非行は遍在化しつつ発生し続けている。少なくとも、社会におけるさまざまな位置が、それぞれに非行の条件となっている。とするならば、そこからは、子どもの社会化にとっての近代的モデルがその再生産装置としての可能性そのものから問い直される必要が出てくるはずである。

しかるに、非行の分析において階級文化の概念が後退するなかで、社会・経済構造次元での階級への視角もまた後退し、ひいては非行を全体社会に関連づける視点そのものも衰退する。それにともない非行を把握する視点は心理主義的なものになる傾向が顕著となり、社会学的な理論においても全体社会の中での構造的な分析よりも、ミクロな相互行為論的、状況還元主義的な枠組に指向する傾向が生じた。しかしそれらにおいては、子どもは近代家族と学校の中に隔離・保護され、しつけられ、教育されれば十全に社会化されるという近代的モデルが暗黙の前提になりがちである。だが、U.Beck (1986-1998) のいう「再帰的近代」の視点を借りるならば、近代化の新たな段階においては階級のアイデンティティが衰退するのみならず、そうした近代社会における再生産のモデルにとっての制度的な基盤もまた問題化するのである。そこでは、そうした近代的モデルを自明視するのではなく、その存立を問題化するパースペクティブが必要となっている。要するに、非行を説明するために新たな全体性のパースペクティブが必要とされるのである。

注

- (1) Clowardの場合には、さらに地域的な大人の犯罪文化が加わる。なお、労働者階級の青年のサブカルチャーを親の階級文化との関連で自覚的に追求したのは1970年代のイギリスにおけるカルチュラル・スタディーズである (Clark et al, 1993)。しかし、それに先行する1950年代アメリカの非行のサブカルチャー論においても、非行のサブカルチャーの形成にとっての条件として親の階級文化の影響は欠くことができない要素となっている。
- (2) 反面、Millerにおいては、社会構造レベルで階級を見る視点は希薄である。
- (3) 非行のサブカルチャーは若者に独自の文化である。Millerの下層階級文化は非行を促す逸脱的な文化であっても、下層階級文化は若者に固有の文化ではないが故に非行のサブカルチャーではない。同時に、非行のサブカルチャーは単なる若者の文化ではなく、若者の逸脱的文化である。しかも、Cohenの場合、非行のサブカルチャーという用語は単に支配的文化と異なるが故に結果

非行の文化におけるアンチテーゼの成立と衰退

的に逸脱的であるというよりも、それに悪意をもってがむしゃらに反抗するというカウンターカルチャーの意味を含んでいる。非行のサブカルチャーは、若者独自の文化であり、逸脱的な文化であり、さらにCohenにおいてはカウンターカルチャーとしての性質をもつ。下層階級文化は逸脱的文化であっても、カウンターカルチャーではない点においても、Cohenのこのような意味での非行のサブカルチャーではない。

- (4) MatzaはCohenのdelinquent subcultureに対して、自らはsubculture of delinquencyと表現している。もっとも、Hirschiの純化された統制論では、統制の弱体化は家族や学校における社会化(規範の内面化)の不十分さの問題となり、中和化の技術としてのサブカルチャーそのものが不必要なものになる。
- (5) たとえばCohenと同様に、MertonとSutherlandを統合することで非行のサブカルチャー論を展開したClowardは、下層階級文化内部の固有な成功目標や地域社会に浸透している大人の犯罪文化による社会化への積極的役割を重視し、反動形成の性質には否定的である点で、Cohenの場合よりもかなりMillerに接近している。また、イギリスのカルチュラル・スタディーズにおける労働者階級の若者のサブカルチャー研究も、必ずしも非行の現象として注目しているわけではないが、アメリカの非行文化の研究を踏まえたものであり、MillerやCohen、Matzaとの接点が多分にある。Phil Cohen (1972) は、スキンヘッドをもはや現実性をもたない親の労働者階級文化に想像において一体化する労働者階級の青年の文化であると解釈している。P. Willis (1977) の描く「野郎ども」の学校文化への反抗は、表面上はA. Cohenの非行少年像と類似しているが、この反抗へと導くのは親の労働者文化の影響による。そして、Willisは、この反抗を通して少年は下層の労働者階級へ進路が固定され、再生産されてゆくと指摘する。
- (6) Cohenの描く非行少年にとっては、非行のサブカルチャーは将来のキャリアにはつながらない。コーナー・ボーイや、それとは表面的には反対であるが、Willisの「野郎ども」のように下層の労働者として再生産されていく途はこのサブカルチャーによっては示されていない。またClowardの分類の中の「犯罪的サブカルチャー」のような職業的・組織的犯罪者の予備軍でもない。むしろ非行は、コーナー・ボーイ及びカレッジ・ボーイが辿る再生産の過程の双方からの逸脱である。それもまた若者の漂流と言えなくもないが、Matzaの描く漂流としての非行が非行サブカルチャーへの規範的一体化をともなっていない分、また同調へと戻ることが容易であるのに比して、Cohenの描く非行の場合には、非行サブカルチャーに一体化しているだけに、そこからの脱出にも一つの飛躍が必要となると考えられる。
- (7) もちろん、基本的には上の歴史的視点を認めつつも、それぞれの理論に描かれた非行少年像を同時代において並存する非行の類型として注目することも可能である。つまり、非行少年の年齢の違いや、居住する地域社会などの特性によっても、それぞれの理論の有効性は異なるものと想定することができる。たとえば、CohenとClowardでは、いずれの理論が正しいかという以前に、そもそも対象とされている若者の年齢が異なり、また念頭に置かれている地域社会の歴史的タイプも異なっている。そこで、Downes (1966) のようにMillerからMatzaに至るまでのアメリカの非行の諸理論をイギリスのいくつかの労働者階級の居住地域に適用して、その地域特性を考慮に入れながらそれぞれの理論の妥当性を検証する、といった活用方法もあろうのである。とはいえその場合にも、それらの地域を歴史的な変化の文脈に置き、意味づける視点が重要であると思われる。

参考・引用文献

- Beck, Ulrich. 1986. *Risikogesellschaft* (東廉他訳『危険社会』法政大学出版社, 1998)
- Cloward, Richard A., and Lloyd E. Ohlin. 1960. *Delinquency and Opportunity: A Theory of Delinquent Gangs*. The Free Press. (Routledge & Kegan Paul. 1961)
- Cohen, Albert K. 1955. *Delinquent Boys: the Culture of the Gang*. Free Press.

- Cohen, Phil. 1997(1972). "Subcultural Conflict and Working-Class Community." in Ken Gelder and Sarah Thornton (eds.). *The Subcultures Reader*. Routledge.
- Clark, John, Stuart Hall, Tony Jefferson, and Brian Robert. 1993(1976). "Subcultures, Cultures and Class." in Stuart Hall and Tony Jefferson (eds.). *Resistance Through Ritual: Youth subcultures in post-war Britain*. Routledge.
- Downes, David 1966. *The Delinquent Solution: A Study in Subcultural Theory*. Routledge and Kegan Paul.
- Hirschi, Travis. 1969. *Causes of Delinquency*. University of California Press. (森田洋司他監訳『非行の原因』文化書房博文社, 1995)
- Kornhauser, Ruth Rosner. 1978. *Social Sources of Delinquency: An Appraisal of analytic Models*. University of Chicago Press.
- Kvaraceus, William and Miller, Wallter B. 1959. *Delinquent Behavior. Vol.1, Culture and the Individual*. National Education Association.
- Matza, David. 1964. *Delinquency and Drift*. Wiley. (非行理論研究会訳『漂流する少年』成文堂, 1986)
- Matza, David and Gresham Sykes. 1961. "Juvenile Delinquency and Subterranean Values." *American Sociological Review*, Vol.26.
- Merton, Robert K. 1957. *Social Theory and Social Structure*(rev.ed) The Free Press. (森好夫他訳『社会理論と社会構造』みすず書房, 1961)
- Miller, W.B. 1958. "Lower Class Culture as a Generating Milieu of Gang Delinquency." *Journal of Social Issues*, Vol.14, No.3. 5-19.
- Orcutt, James D. 1983. *Analyzing Deviance*. The Dorsey Press.
- Sutherland, Edwin H. 1939. *Principles of Criminology* (3d ed.). Lippincott.
- Sykes, Gresham M. and David Matza. 1957. "Techniques of Neutralization: A Theory of Delinquency." *American Sociological Review*, Vol.22 (Dec.), 664-670.
- Whyte, William F. 1943(1993). *Street Corner Society: The Structure of an Italian Slum*. Enl.Ed. University of Chicago Press. (奥田道大他訳『ストリート・コーナーソサエティ』有斐閣, 2000)
- Willis, Paul. 1977. *Learning to Labour: How working class kids get working class job*. Saxon House. (熊沢誠他訳『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房, 1985)